

すべての道はローマに通ず
— 奈良女でのすべての道は東大
に通じていた —

あなたの東大生に対するイメージはどんなものでしょうか？何でも即座に理解することができる天才、写真記憶が出来る天才、語学の天才…。

私が入学して感じたことは、そんな人は東大の中でもごく僅かであるということです。一方で、多くの人が多様なものやことに興味を持ち、様々な活動に挑戦しているということも同時に感じました。そして、何をするにしても楽しんで行っているようにも感じました。つまり、中高時代、多くを犠牲にし、勉強だけに捧げていた人はほとんどいないのです。そう言った意味で、奈良女での生活は様々な経験をすることができる貴重な環境であるのだと改めて感じました。奈良女では私も参加していたPICASOコース

を始めとして文理にとらわれない
学びや高度な学術研究に触れるこ
とが可能です。この多様な選択の
幅がもたらす大きな意味、それは、
あなたが現時点で持っている学術
的な関心を、それが漠たるもので
あろうと明確なものであろうと自
己相対化させる事にあると思いま
す。文化人類学者の森山工教授が
おっしゃっていたように、自己相対
化するとは、自分が関心とする分
野以外にも文理にわたってこれだ
け広い領域のいわば「沃野」があ
ると言うのを知ること。そして、そ
の知の「沃野」の中に自分の関心
を位置付けてみる事。さらには、
自らの関心を自らの外側に立って
相対化して見つめてみる事。この
ような経験は自己に単純に充足せ
ずに、自己を外部に開き、自己を
他者との関係において位置づける
力の涵養に通じると言えるでしょ
う。さらには、中高生という同質性
に一元的に還元されることなく女
子大附属生という多様性を持った

存在に還元されると言えるので
す。

そして、何かを専門にして深く追及する際にも幅広い教養が必要であるといえます。穴を掘る様子を想像してみてください。深く掘ろうと思えば、間口を小さくして掘り始めることが最初のうちは効率的ですが、ある程度まで掘り進めるとスコップは間口に引っかかり掘り進めることができません。間口を大きく取り、そこから中心へと掘り進めることでより深く掘ることができるのです。自己を安易に固定化するのではなく柔軟な吸収が求められるのです。けれども「テキトウ」に手を出すことは、定まりのない空虚な自己に、雑然としてまとまりのない有象無象の他者達の侵襲を招く事になりかねません。「適当」に手を出すことが肝要なのです。では、その「適当」とはどのような判断に基づくのでしょうか？それは自分が「楽しめる」ものであると

言うことです。言い換えれば、何をするにしても楽しんで行うことができれば、「適当」なものとなるのです。

私にとって東大に通うことなど夢物語でした。一般受験では可能性はなかったかもしれません。しかし、何かをしたいという漠然とした気持ちが芽生え始めた3年生の頃、スキー合宿の委員長に立候補してみようかと、ふと思ったことから私の中の興味が「適当」な具体性を持って立ち上がり、それを端として次々と繋がる奈良女での経験、そして何よりも、すべての経験を楽しんでいた事が東大推薦合格へと結びついたのでと思います。ですから、身近に存在している小さなきっかけから起きる多様な経験が最後に進路実現の強力な支えとなるかもしれません。この文章を読んでいる今、何かの委員を募集していませんか？教室には何かの募集チラシがありませんか？今気になる活動

はありませんか？そのきっかけを
掴み、それを楽しんだ経験があなた
の進路をより良い方向へと導い
てくれるでしょう。